

森下 徹著

『近世瀬戸内海地域の労働社会』

中山 富広

本書は前著「日本近世雇用労働史の研究」(東京大学出版会、一九九五年)に続いて、著者が放つ近世労働史研究の第二弾である。周知のように、著者の労働史研究は近世社会の固有性に着目したものであり、近代賃労働との相違を明らかにし、かつ武家奉公人の多くを士分ではなく「日用」層としてとらえることにその意義がある。まず本書の概要を紹介しよう。

第一編は萩藩の足輕以下の直属奉公人を考察した武家奉公人論である。

第一章「武家奉公人の身分意識」では、特定の家筋から供給される直屬奉公人が身分序列に固執した意識をもっており、そのような彼らの身分意識が彼ら自身の労働（対価の獲得を目的にせず）を固定・非適応化していくこととなり、そのことが効率よくさまざまな用途に使用しようとした藩庁との対立を生み、やがて彼らの労働観は否定されていったことが明らかにされている。

第二章「萩藩庁の手子と中間」は、藩庁の諸役所の末端で実務を担う手子が中間によって占拠されていたこと、中間のなかには手子を長期間勤めて蓄財し株を集積する一握りの中間と、「役」を肩代わりする多数の中間に分化していることを明らかにしている。そして役所で実務を担当し、その地位を株化していた中間の存在形態も近世後期の一つの「日用」形態であり、その性格を再検討する必要があることが指摘されている。

第三章「萩藩の江戸奉公人確保」では、江戸詰めの直屬奉公人には江戸番手とよばれた役があり、中間が国元から出向く原則であったが代役を雇用して差し出すことが

一般化していたこと、その背景には中間などの地位の物件化が進み売買の対象となっていたこと、および領内全域を覆う幹旋業者の存在が大きく、供給に不足はなかったことが実証されている。また第二章でも指摘されていたが、直屬奉公人は武士身分に對してはあくまでも周縁的な存在であった。

第四章「武家奉公人の徴発と雇用労働」は、萩藩の支藩である徳山藩を対象として武家奉公人の徴発を検討したもので、それが徳山町・徳山村に成立していた雇用関係に規定されており、市場価格より安価に奉公人を確保したいという藩とのせめぎ合いの關係にあったものであり、決して「行政の請負システム」などというものではなかったことを主張されている。

以上が第一編の概要である。次に第二編の出稼ぎ職人論の各章を紹介しよう。

第五章「出稼ぎ大工と地域社会」は幕末期の岡山藩領と萩藩領を素材として出稼ぎ大工を分析したものである。ここでは出稼ぎ大工を受け入れる地域社会では、地元の大工たちが一種のカルテルを形成していたこと、それに対抗して島嶼部から出稼ぎ大

工を招致していたことなどを明らかにしている。そして出稼ぎ大工を組織化された労働力の一環としてとらえる必要性を指摘されている。

第六章「萩藩の大工編成と出稼ぎ大工」では、萩城下の町大工編成が御木屋という機関で行われ、町大工も御木屋への登録と水役負担を通して横断的な同職集団を形成していたこと、そしてその同職集団が近世後期にも存続し続ける背景に出稼ぎ大工の台頭があったことを明らかにしている。

第七章「防長地域の新田開発と石工」は石材の供給地から需要地に至る石材業の全過程を明らかにしたものである。石材の産出地では特定の業者が採石と販売を独占していたが、新田開発（開作）で石材の需要が高まると、採石だけではなく運輸も行う新興の業者が成長して特権的業者を圧倒したことが、また需要地では特権的な大坂石工が開作普請を独占していたが、後期になると一々二宰判をテリトリーとする石頭のもとに地元の業者―出稼ぎ石工が請負うことで普請に参加し、特権的な石工を圧倒したという。そして近世本来の職人編成が衰退したからといって、自由競争の段階が訪れ

るのではなく、瀬戸内海地域に固有の社会構造（幕藩領主の地域編成を凌駕する分業構造）が形成されていることを指摘する。

第八章「倉橋島の造船業と船市」は、広島藩領倉橋島の造船業が一八世紀半ばに資金不足と材木確保の困難によって衰微したこと、その打開策として船市・船入札（富籤）が画策されたことなどを明らかにしたものである。そして船の販売が特定の顧客との関係などによって成り立つものであり、経済的な関係だけで商品の取引を論じることができず、それを成り立たせている諸関係（資材の調達から需要者との関係など）を考察することが、産業史・商品流通史に求められていることを指摘されている。

以上のように、武家奉公人論にしても出稼ぎ職人論にしても両者に共通していることは、安直に近代労働史の前史としたり、逆に身分制的編成や束縛を強調しすぎたりすることなく、近世の雇用労働の固有性をその時どきの背景を踏まえながら具体的に論じていることに特色があり、本書の意義をさらに高めているといえよう。評者は芸術地方を研究対象としているが、とくに

出稼ぎ職人論で指摘されている瀬戸内海地域固有の社会（分業）構造の解明へ向けての著者の手法に啓発されること大であった。

また著者はすでに長州藩の木綿織を中心とした産業構造・社会構造の分析にも着手されており（渡辺尚志編『幕末維新期萩藩村落社会の変動』岩田書院、二〇〇二年）、民間における雇用労働の解明が進展することは間違いないであろう。

最後になつたが、高木昭作氏から始まつて朝尾直弘氏・吉田伸之氏・塚田孝氏らに至る身分論・身分的周縁論の動向を述べた序章「身分的周縁論と労働史研究」は、その方面に暗い評者にとつてわかりやすい研究史論となつており大変参考になることを付け加えておく。また「萩藩の奉公人徴発」「福田新田開発と瀬戸内の石工」という二つの補論の紹介を割愛させていただいたことをお詫びしたい。

（なかやま・とみひろ 広島大学大学院教育学
研究科助教授）

（A5判、三二四ページ、八四〇〇円、淡水社、
二〇〇四・三刊）